

第128回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2020年12月14日 (月) 郵送句会

兼題 「闇鍋」「羽子板市」

- 川井素山 ○エビ鯛の企みばるる闇夜汁  
湯豆腐の湯気にかくるる貴船の瀬  
下町に鍛冶の遠音や小六月  
老骨の語学講座や冬薔薇
- 保井寶正 ○闇鍋やジビエの命さずかりぬ  
羽子板の値切りし錢や粋祝儀  
ポインセチア赤極まりて悪女なり  
焼葱や深谷の土の蜜啜る
- 佐久間喬 ○打ち返すコロナの羽子や羽子板市  
縁側でコロナ禍語り冬ぬくし  
薪ストーブ炎しずかに独り酔ふ  
城あおぐ人のあふるる小春かな
- 丸山酔宵子 ○爽やかに映える水面の棚田かな  
漆喰の原野を晒すビーバームーン  
水鳥の波紋に揺れる冬紅葉  
樹々の間を貫き伸びる冬夕焼
- 吉田啓悟 ○手を包みたき人も居て闇の汁  
いつまでも窓を動かぬ冬の雲  
またひとつ空家の増ゆる冬の夜  
山眠る後悔多く不眠症
- 青木英林 ○闇鍋は青春時代振られし夜  
鼻の声にも怯えソロキャンプ  
憩ふ鴨羽ばたきするも渡り前  
晦日蕎麦打つ手休めて酒含む
- 山本草風 ○病院の長き待合十二月  
一木の銀杏黄葉の孤独かな  
初霜やフロントガラスに似顔あり  
闇鍋や迷い思案の箸の先
- 渡辺鯨波 ○羽子板市暮れて輝く団十郎  
闇鍋に第六感呼び覚ます  
湯豆腐や科を作って若女将  
小春日やデパ地下で会うお隣さん

- 後藤克彦 ○蓑虫や住めば都の軒の下  
二頭して旅は道連れ冬の蝶  
コロナ禍のマスク小町や酉の市  
闇鍋や七皿食うて鮫臭い
- 原 晶如 ○海老蔵の睨みと決めて羽子板市  
牡蠣殻を積む<sup>あつけし</sup>厚岸に島の風  
鍋底の焦げを干したり冬日向  
生木くべにわか庭師の大焚火
- 永井正孝 ○羽子板に世相の動き読み取れり  
闇鍋におそろおそると入れしもの  
日短に犬の散歩も早まれり  
裸木となりて齢を誇りをり
- 佐久間たか子 ○植木屋の小気味よき音師走かな  
月あかり羽子板市の栄華なり  
紅葉散る<sup>いにしえ</sup>古 偲ぶ比叡参り  
風花や吹奏楽に熱気あり
- 金森純女 ○テレワーク独り居る家暮早し  
押し黙り羽子板選ぶ人の群れ  
冬ざれや喪中はがきのまた届き  
酒蒸しの鱈を作りし七回忌
- 青葉ひかる ○新しきひかり迎え打つ羽子板市  
枯れ葉道踏みしめて聴く音色かな  
寄る辺なき流木に降る紅葉かな  
銀の雪キャンドルライトに舞っている

次回「萩句会」

日時 2021年1月11日（月）

郵送句会

兼題『雪だるま』または『薄氷（うすらい）』一句

当季雑詠 三句

投句の締め切りは1月8日（金）です。